

氏名(本籍地)	田中直毅(福島県)
学位記および番号	博士(歯学), 第375号
学位授与の日付	令和2年3月10日
学位論文題名	「Bone Morphology Measurements in Anterior Tooth Region of Edentulous Jaw」
論文審査委員	(主査) 宇佐美晶信教授 (副査) 原田卓哉教授 関根秀志教授

論文の内容および審査の要旨

【研究目的】近年、口腔インプラントを利用したオーバーデンチャーの普及が広まってきている。下顎無歯顎患者におけるインプラントオーバーデンチャーに際して、インプラント体の埋入部位は左右側切歯犬歯間部に1本ずつの埋入が、おこなわれている。患者の負担減少のためにも下顎正中部に1本の埋入のみで充分とする報告もみられる。そこで、下顎無歯顎正中部及び側切歯犬歯間の骨形態計測をおこなった。

【研究方法】試料は、下顎無歯顎の本大学歯学部実習用遺体10体を用いた。通法に従い歯科用コンピームCTにて、左右オトガイ孔が照射野に収まるように撮影した。得られた画像において、水平部が下顎下縁平面と平行になるように再構成をおこない、正中部を左右側切歯犬歯間部で以下の項目についてそれぞれ計測をおこなった。①唇舌断面上の歯槽頂から下顎下縁までの垂直的距離②唇舌断面の最大幅径③唇舌断面上の骨梁面積率

【研究結果】正中部の唇舌断面上の歯槽頂から下顎下縁までの垂直的距離は平均 21.8 ± 5.9 mm、唇舌断面の最大幅径は 13.4 ± 1.2 mm、骨面積率は $47.7 \pm 11.9\%$ であった。左右側切歯犬歯間部の唇舌断面上の歯槽頂から下顎下縁までの垂直的距離は 21.6 ± 6.6 mm、唇舌断面の最大幅径は 11.7 ± 1.3 mm、骨面積率は $36.1 \pm 7.2\%$ であった。正中部と左右側切歯犬歯間部の垂直的距離に有意差は認められなかったが、最大幅径と骨面積率に有意差が認められた。

【考察・結論】正中部と左右側切歯犬歯間部の比

較をしたところ、骨幅と骨面積率は、正中部が大きい結果となった。この結果より、左右側切歯犬歯間部より正中部が埋入時のポジショニングに際し、自由度が高くとれる可能性が示唆された。また、正中部の荷重負担能力が高い可能性があるとして示唆された。

【審査の経過と結果】本論文に関する一次審査委員会は3名の審査委員により令和2年1月15日に開催された。審査委員は、事前に配布された本論文を真摯に読み、学位論文としての学術的な価値について詳しい検討を行った上で審査に臨んだ。一次審査では、初めに申請者から本論文内容についての説明があり、その後審査委員から質問がなされた。質疑応答の主なものは、1)本研究の臨床的背景について、2)下顎骨正中部と左右側切歯犬歯間部の骨形態の比較について、3)今後の課題についてであり、質問に対する申請者の回答は適切なものであった。申請者は学位論文作成に際して実験結果を十分に検討しながら討論を進めていたことが推察できた。また、審査委員より論文の文章ならびに図表の一部に修正が求められたが、後日提出された論文では適切に修正されていることを一次審査委員会が確認した。本論文はインプラントオーバーデンチャーに際して、正中部は側切歯犬歯間部よりもインプラント埋入時にポジショニングの自由度が高くとれる可能性についての新たな知見を示したものであり、歯科医学の発展に大きく寄与するものと考えられる。したがって、一次審査委員会は提出された論文が学位論文としての学術的価値を持つものであり、申請者に博士(歯学)の学位を授与できるものと判定した。

掲載雑誌

奥羽大学歯学誌第47巻4号: 115-120, 2020年